

エッセイ — 特集：複数言語環境で成長する子どもたちはどのように言語と向き合い、生きようとしているのか

複言語・複文化環境で成長してきた「私」は、 どのように複言語と向き合い、生きようとしているのか

幼少期から現在にかけて「ルーツ」への捉え方の変容を経験して

北村 名美 *

© 2024. 移動する子どもフォーラム. <http://gsjal.jp/childforum/>

はじめに

私は、これまで自分のルーツ(日本と韓国)について自ら他者に話した経験がない。その理由について考えた時、様々な理由が思いつくが、端的に言うともルーツについて考えなくても難しく生活できるからだ。私は外国人名を持っているわけでもなければ、見た目も日本人と変わらない。そのため、私から他者に話さない限りは、私が日本と韓国のダブルだと気付かれることもない。だが、自ら他者に話さない最も大きな理由は、ひとたび自分のルーツについて話してしまうと、他者からどのようなまなざしが向けられるか、不安だったからだと考える。

私は大学院を修了し、現在、多様なルーツを持つ子どもたちへの教育に携わっている。このタイミングで、自分自身のルーツに向き合い、ライフストーリーを書いてみたいと思った。その理由は、過去から現在にかけて自分自身のルーツの捉え方に変容があったからである。

* 早稲田大学日本語教育研究科修士課程修了 (Eメール: nami_kitamura@fuji.waseda.jp)

1. 小学生から高校生

私は三重県に生まれ、生まれてから高校まで三重県で過ごした。私が日本と韓国のダブルだと知ったのは、小学生の時だった。私の母は韓国ルーツであるが、家庭内言語は日本語だったこともあり、母の韓国語を聞く機会はなかった。母との何気ない会話でルーツについて少し聞いたことがあった。そして、韓国料理がよく食卓に並んでいたことや韓国文化について教えてもらった経験から、小学生ながら漠然と「自分は韓国にルーツがあるんだ」と自覚するようになっていった。

母との何気ない日常会話から自分のルーツを確認する機会があった。母は幼少期の頃、曾祖母が韓国語を話している場面をよく見ており、そして、曾祖母の口癖が「뭐하냐 (何してるの)」だったことから、母も時々会話の中で使っていたと話した。

私は、家庭内言語が日本語だったことから、韓国文化に触れることはあったが、韓国語を学ぶ機会がなかったため、韓国語ができなかった。そのこともあり、私が小学生から高校生にかけて、自分のルーツを周りに明かさず、そっと自分の胸の内にしまっていた。なぜなら、言語が分からないのにそのルーツを名乗る資格がないと考えていたからだ。

2. 大学生

大学は関東の大学に進学を決めた。その理由は、環境を変えたら、何か人生が変わるかもしれないと淡い期待があったのだと考える。そのような淡い期待を持ちながら、大学生活がスタートした。大学1年生、2年生の時期は高校生までの自分と同じく、自分のルーツを胸にしまったまま過ごした。しかし、大学3年生の頃、自分の運命を変える出来事があった。2018年～2019年の1年間、米国のカリフォルニア大学アーバイン校（以下、UCI）へ留学することが決まり、そこで運命を変えるたくさんの出会いを経験した。UCIがあるアーバイン市は、ロサンゼルスから車で1時間程の所に位置し、日系人を含む多くのアジア系移民が住む市である。UCIでは、多くの日系人が所属するサークルに入り、そこで自分の考え方が変化する出会いを経験した。日本にルーツを持つが日本語が話せない学生や、日本と韓国のダブルだが日本語・韓国語が分からず英語のみで会話をする学生と出会った。彼らに共通して言えることは、言語能力に関係なく、自分に自信を持ち、自分がルーツを持つ言語をネイティブスピーカーの

ように話せない自分もまた「自分らしさ」であると認識していることだった。

彼らとの出会いから、言語能力に関係なく、自分のルーツを大事にする気持ちを持たなければならぬと考え方が大きく変わり、日本に帰国した。そして、日本に帰国して1カ月もたないうちに、自分が幼少期に学ぶことができなかつた韓国語を学びたいと思い、韓国語教室に通い始めた。授業初日には、なぜ韓国語を学びたいのかについて韓国人の先生に尋ねられた。その際、自分のルーツを他者に説明することができるほど、自分のアイデンティティが確立していなかったことや自分のルーツを伝えた時、相手からどのようなまなざしが向けられるか不安だったこともあり、「韓国旅行に行くときに、現地で話せるようになりたいからです」と無難な解答をした。自分の気持ちに反したその瞬間は、もどかしかったことを覚えている。韓国語教室に1年半通い、中級レベルの韓国語ができるようになったことで、自分の身体の中に、日本語・英語だけでなく韓国語もようやく加わった嬉しさは今でも覚えている。

このような私自身の経験から、自分のルーツを大事にすることの重要性を学び、この経験をもとに卒論を書くことに決めた。そして、親が持つ言語を継承して学ぶ「継承語教育」に興味・関心を持ち、大学の卒業論文では「複言語・複文化環境で成長する子どもの継承語教育の現状と課題—三重県の朝鮮学校を支える教師の語りから」をテーマとした。朝鮮学校を調査対象先として選んだ理由は、自分のルーツだけでなく、自分も所属できる居場所を国内で求めているからだ。自分が生まれながら備えているルーツを大事にして生きていきたいという気持ちを大事にするために、そのような自己を支えてくれる居場所を日本で探していたのだ。

朝鮮学校では、幼稚部から中等部までの授業見学と、校長先生と指導教諭に直接インタビューをさせていただいた。朝鮮学校は、同胞¹教育を行い、在日コリアンという血統を重視している²ことから、私も受け入れられるだろうと期待していた。しかし、実際はそうではなかった。朝鮮学校における同胞とは、在日コリアンのルーツを持っているだけでなく、朝鮮学校で共に学んだかどうかを重視されていると感じた。各種学校である朝鮮学校は、国や地方自治体から補助金をほとんど受けることができないため、朝鮮学校を卒業したOB・OGが学校運営資金を寄付したり、学校の清掃活動に従事したりして、縦のつながりを非常に大事にし

1 「同じ腹から生まれた」という意味から、同じ血統・民族・ルーツを持つ人々の集団を指す。

2 近年では、在日コリアンの子どもだけでなく、韓国人の親を持つ子どもや、日本と韓国のダブルの子どもなど、多様な背景を持つ子どもたちが通っている。

で生きていることが分かった。つまり、朝鮮学校で学んだ者たちが共に困難を乗り越え、支え合って生活していくことが重要で、そのことを同胞と指していると読み取った。私は、朝鮮学校を卒業してもいないし寄付をしたこともない。ただ血統を持っているだけでは朝鮮学校のコミュニティに所属できないということを学ぶことができた。この経験により、朝鮮学校で学ぶ人々の継承語への熱い思いを深く理解し卒業論文を書き上げることができたが、自分の求めている居場所を国内で見つけることはできなかったことから、閉塞感は残り続け、「自分という存在」について考えるようになっていった。朝鮮学校で学ぶ児童生徒たちは、幼少期より朝鮮語と日本語に触れながら成長していくが、私はただルーツを持つだけで「それ以外何もない存在」なのだと感じるようになった。このような思いを持ったまま大学院試験を迎えることとなった。

大学院へ進学しようと決意した理由は、大学で研究していた「複言語・複文化環境で成長する子どものアイデンティティ形成や継承語教育」についてさらに深く研究してみたいと思ったからだ。同時に、自分のルーツへの思いやこのモヤモヤ感を解決できるかもしれないという期待もあった。大学院の出願書類を提出する際、「複言語・複文化環境で成長する子どものアイデンティティ形成や継承語教育」についてさらに研究したいという思いは書いたが、自分が日本と韓国のルーツを持っていることや、自分のアイデンティティの葛藤などは書くことができなかった。自分のルーツを大事にしたいという思いはあったものの、それを他者に言う勇気が無く、伝えたい気持ちと伝えられない気持ちのジレンマに陥っていたように感じる。

3. 大学院生

大学院では、複言語・複文化環境で成長する子どものアイデンティティやことばについて、興味を持ち、年少者日本語教育学を専門的に学べるゼミに入った。ゼミでは、ライフストーリーだけでなく、自己エスノグラフィーという研究方法があることを知った。そして、川上郁雄先生の書籍やゼミの先輩方の自己エスノグラフィーを読み、個人の「主観」に目を向けることや、個人の「声」を聴くことの重要性について学んだ。大学院受験という人生を左右する瞬間でさえも、自分のルーツやアイデンティティについて書いたり、自信を持って話したりすることができなかったが、大学院に入学してから1年が経過した頃、自分のルーツに対する思いがさらに強くなっているように感じた。ゼミの先輩方の中にも私と同様に、ルーツやアイデン

ティティへの葛藤を経験した方々がいたが、彼女たちは、その葛藤を真摯に受け止め、その経験は現在の彼女たちを作っている重要な要素であることを、認識していたのだ。そのような姿を目の当たりにしたこともあり、私も自分のルーツやアイデンティティの変容を「書いて話してみたい」と心境が変化していった。そして、自身のこれまでの経験と記憶を書くことによって、以前の私のように自分らしさとは何か、自分が持つ複言語・複文化とどのように向き合っていくべきか考えている方々の「心」に寄り添うことができるかもしれないと考えた。

4. 考察

私は、自分のルーツに対する思いや考え方が、幼少期から現在にかけて大きく変容したように感じる。現在では、他者のまなざしにとらわれることなく、ルーツや今までの経験や記憶を価値のあるものと認識し、それを他者に伝えてみたいと思うようになった。以前は「ルーツ＝言語」として認識し、韓国語が話せないのに自分のルーツを言う資格はないと思っていたが、アメリカでの様々なルーツを持つ人々との出会いや大学院で専門的に日本語教育を研究していく中で、自分が持つ複言語・複文化に改めて向き合い、正面から考えられるようになった。

大学時代には、朝鮮学校という既存のコミュニティに自分も所属したいと思っていたが、実際に朝鮮学校に赴き、先生方にインタビューをしたり、授業を見学したりするという体験を通して、「私」という人間を既存のコミュニティにあてはめるのではなく、自分と全く同じ経験をしている人はいないのだから、自分の個性を大事にして生きていったらいいのではないかと考えるように変容していった。

自分のルーツに向き合う上で、そのルーツを積極的に捉えられる時もあれば、悲観的に捉えてしまう時もあり、時には自分のルーツを考えないようにしていたこともあるなど、自分の気持ち日がよって変化した。しかし、現在では自分という唯一無二の存在を誇りに思い、今までのポジティブな経験もネガティブな経験もすべて、現在の「私」を作るうえで欠かせない運命的な経験だったと思うようになった。何か一つでも欠けていたら、今の私はいなかったのではないかと思う程、大事に思っている。

5. おわりに

今回、本稿を書くことを決めた理由は、自分のルーツへの考え方の変容を書いてみたいという思いだけでなく、複言語・複文化環境で成長する子どもや、彼らを支える教員・保護者等に微力でも心の支えとなるかもしれないと思ったからである。また、現在自分が多様な背景を持つ子どもたちを支える立場として現場で働いているからだ。

私は今まで様々な方の自己エスノグラフィー（例えば、川上, 2010；川上, 三宅, 岩崎, 2022）を読み、自分がアイデンティティ・クライシスを経験した時、ルーツを大事に思えない時に、精神面や自己成長面で、非常に助けられたと感じている。そのため、今回、私が自分の経験をエッセイとして共有し、読まれた方々の「心」に一部でも寄り添うことができれば幸いである。

文献

- 川上郁雄（編）（2010）. 『私も「移動する子ども」だった——異なる言語の間で育った子どもたちのライフストーリー』 くろしお出版.
- 川上郁雄, 三宅和子, 岩崎典子（編）（2022）. 『移動とことば2』 くろしお出版.